

神宮式年遷宮に奉仕して

掌典 星 野 輝 興

私が今回の大儀に奉仕して最も感じたのは、御祭典の當日ではなく寧ろ翌朝の新聞紙に載つてゐる大官連の感想談を見た時の事であつた。それを讀んで見ると、其れ等の大官たちは、今回の式年遷宮に當つて國體の眞髓を深く了解したと殆ど萬口一齊に語つてゐるが、乍併何に由つて爾く感じたかと云ふ事には一言も觸れてゐない。そこで私は色々考へて見たが、やつぱり明確な想像はつかない。併し其のわからない中にも、唯一つ分つてゐるのは、參列奉拜者の凡てが、神宮の廣前に額いて、「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」と云つた、あの西行法師と、同一の感激に打たれたに違ひないといふ事である。

私などは、お儀式を滞りなく又過ちなく濟ませる爲に絶えず心配りをしてゐねばならぬ職責があつた

ので、強ひて心を静にして、湧起る感激を抑へてゐるが、畏くも皇祖の大御靈が約二十人の神官に奉ぜられて、行障絹垣の中に在しましつゝ、進御になつた時には、我知らず強い感激が起つて、譬へやうもない森嚴さと、非常な御懐しさとを感じた。恐らくこれは、あの場合何人の胸にも起つた感激であつたらうと思ふ。大官たちが、今回の式年遷宮に參して國體の眞髓を了解したと云はれる其の心持も、畢竟此の感激の中から生れて來たものである。

しかし此の感激は、特に神宮の式典に際してのみ起るものではない。我々は皇祖の神の御遷宮に當つて、譬へやうもない森嚴さと、それに伴ふ非常なお懐しさを感じる如く、平素にあつては、常に皇室に對して之を感じるのである。我が日本の國體は君民同祖の大家族制であつて、皇室と國民とは親子の關係に立つものと觀られてゐる。皇室に對して國民が無限のお懐しさを感じ、父の如くお慕ひ申上げるのは之が爲であるが、假令親子の間に於ても自然に感ぜざるを得ないのは、皇室の尊嚴である。尊い靈威に打たれて起る所の森嚴なる感じである。此の感じこそは殊に大切なものであつて、皇室に對しても神に對しても、崇高森嚴を感じつゝ、而も其の一面に於て非常な懐しさを覺えるところに日本人の思想の特色が存するのである。明治以來無神無靈魂的の傾向が生じて、神社をも單なる祖先崇敬の對象として觀るに至つたので、神人關係が感激性の薄いものとなり、横をのみ考へて縦を忘れてゐる觀があるが

我々の考へる所に依ると、神は同血の關係に於てのみ觀るべきものでなく、森嚴さの籠つた神人關係の對象として仰ぐべきもので、其處に重大なる意義が存するのである。私は御遷宮以前に神道關係諸團體の催しで、御遷宮の意義を徹底させる爲に開かれた講演會に講師の一人として臨んで、神宮と賢所との關係から我が尊皇心を説明し、恐れ多さの奥には懐しさがあり、懐しさの中には恐れ多さがある、此の心持が我が國體の基礎を成してゐるのであると述べたが、それが御遷宮の時には、實際にピッタリと符合して現れたので、一層其の信念を強めたのであつた。

二

次に今一つ我々が感じたのは御遷宮祭に於ての青年の態度である。世間の一部には、近來優秀な頭腦を持つ高等學校生及び其他の青年は多く赤化の傾向があると言ふ者がある。私はそれを聞いた時に、果してそれが事實ならば學校關係者は天下に罪を謝さねばならぬと痛感した事であつたが、今回の御遷宮式に各學校から代表者として一人づゝ選出された優秀生の凡ては、終始頗る謹嚴なる態度であつたといふことを、直接其の場合に立會つた人から聞いた。但し細かい事を云ふと、高等學校以上の學生は極めて小さな儀式・出來事には無關心であつた反對に、イザとなると緊張した謹嚴さを以て肅然と之に對した。これは同じやうに列んでゐた小學生が、小さい事には非常に感激してゐたにも拘らず、愈々の時に

は餘り感激の色が見えなかつたのと比べて、面白い對照であつた。それについて思ひ出すのは、大禮後の御親閲の際に於ける青少年團の行動であるが、これが又小學生と同じであつた、との事である。私は此の事を承つて、これは非常に重大なる事である、是非文部省で材料を蒐集して之れを天下に配附して貰ひたいものであると希望を述べて置いた。一部の人々に依つて思想の惡化を疑はれてゐる高等學校の代表者が、小事には冷淡であるが、愈々の時には心から謹嚴なる態度で接したといふのは、人意を強うする事であると共に、青少年團や小學生が小事にのみ感激して大事の場合に謹嚴の度が足りないと言ふ事は、神道家は勿論、團體教育に直接當る人の心すべき事である。どうか一般に無暗と小さい事にのみ感激させず、ドツシリした事に感激させるやうにしたいものであると思ふ。

次に御遷宮の時に於ての一般人の感激がどうであつたかと云ふ事は、只之を拍手の音に聞く外はないが、内宮の時は雨で、色々と心を勞する事が多かつた爲か、殆ど拍手の音に氣づかなかつた。ところが外宮の時は、晴天で心も晴々としてゐたので、明らかに拍手の音を耳にした。それは勅使の御祭文奏上を機として、儀仗兵司令官の嚴そかな「捧げ銃」の號令が聞えた其の重大な機會に、奉拜者が緊張した心持で發した拍手の音で、まるで霰が降るやうに近くから遠くに響いて、實に何ともいへぬ快い響であつた。ところが御祭文の儀が畢つて愈々渡御の儀に移り、イザ御開扉といふ時に成つて又拍手が起るか

思つて豫期してゐたが、殆んど起らなかつた。それから神儀が新殿に移御になつて閉扉の時にも同様拍手は殆んど無かつたが、お扉が閉ぢられて勅使が御階下の版に進み、御祭文を奏上されると又拍手が起つた。民衆が果して行事の始と終との時を知つてゐたのか否かは知らぬが、勅使の行動と一致して、御祭文奏上に最高の感激に打たれて拍手したといふ事は注意すべき事實である。

又御列進御の時の事である。神儀が板垣御門から出させ給ふのを拜すると、一時に急霰のやうに、近くから遠く、遠くから又近く、拍手の音が起つたが、或る場合に御列の進行が止まると、不思議に拍手はピタリと止んで、再び進御が始まつたと見ると、又盛に起つて來るのである。これは拍手が感激によつて起ることを實證するものであると私は考へる。普通には、拍手は神主の敬意を表す作法だといふ事に成つてゐるが、私共は鎮魂祭で三十二拍、神宮で十六拍する外には、公人として妄に拍手をしない事にしてゐる。之については屢々詰問を受けるが、元來拍手は敬意を表す作法ではなく、感情の激發の表示である。喜ばしい時にもすれば、悲しい時にもする。殊に神から奉仕者に對して拍手を賜ふ儀式すらもある。若し拍手を敬意を表す作法であるとするならば、此の場合には、神から人間に敬意を表せられるといふ不都合を生ずる。これは何としても感激の表示でなければならぬ。御列進御の時には民衆が拍手するに拘らず、停止の時に拍手の音が起らぬのは、感情の激發がないからである。そして再び動く

嗟には急に又感激に打たれて拍ら続けるのである。宗教的には又別の観方があること、思ふが、私は右の如く考へて自説を確め得たことに満足した。

三

次に今一つ、遷宮の意義如何といふ事については、昨春以來多くの學者の説が出たが、私は他の人々とは稍異つて、遷宮祭は、皇祖の御光の新しき輝きを拜する御祭、天の下のためにと御光の新しく輝き給ふ御祭であると解してゐる。そこで、さういふ豫感を以て拜したせいか、私は廣前に出て、新しい稜威の輝きを切實に感じた。これは信仰に亘る事であるが、内宮でも外宮でも同様に、常ならぬ鋭い新しい靈の光を感じたので、自分ながら驚いた程であつた。殊に内宮で御神樂の式が行はれた時などは、兩夜の事であつたが、誠に神の新しい御光は御殿の柱々にまでも、太く輝き亘つてをられるのを感じた。一部の學者の中には、今回の御遷宮式を以て單なる新築祝の如く心得てゐる人もあつたやうである。或はさういふ意味もあらうが、民衆が祭儀の最高潮時に當つて感激の餘りに拍手した事實から觀ても、民衆が何十萬、何萬と押し寄せて來るのは、恰も佛堂に於ける開帳の時と同じく神の新しき御光を直接に拜し、其の御光を直接に身に受けるといふことであるまいかと考へる。

更に尙一つ私が感じたのは祓についてである。神宮の勅使の祓は普通は世木社内でする事に成つてゐる

るが、式年遷宮の時に限つて勅使一行は宮川で祓を受けるのである。等しく祓である以上何處で受けても一つであるが、其の場所が千何百年かの古い由緒を持つ神聖な宮川であり、其の行事が幾千年來の神事であるといふ事に依つて、眞に清められる感じがした。場所から受ける精神的影響は實に大きいものであるから、將來の祓は、やはり昔のやうに川原へ出て行ふべきものである。近來土俗學の流行に伴れて、神事を原始信仰に引下げんとする傾向が著しく、神職の中にも、それに應じて祓其他の神事を参考に眞似て見せる者もあると聞くが、苟くも神に常侍する者の行動は眞似であつてはならぬ。隨つて祓の如きも、精神の入らない形式のみに止まつては、決して清められるものではない。故に眞の祓をする爲には實際の境地に臨んで行ふ事が必要である。私は宮川で祓を受けて、全く心の底までも現實に祓はれた感じがした。

そこで、それについても思はれるのは、凡て神事の精神は實際の境地に立つた者でないと分らぬといふ事である。昨年の大禮の時にも、一部の學者の説には、見當違ひの有様なものが少くなかつたが、今度の遷宮の時にも、やはりそれが在つた。これは多くの學者が祭儀に接した事のないためであつて、我々から見ると、それでは學問の立て方が間違つてゐると思ふ。苟くも國學を説き、神道を論ずる以上、實際の神儀に接して親しく之に奉仕し、然る後に始めて、祭祀の眞義を聲明して貰ひたい。單に模型的

な、若くは文字の上の祭式ばかりを見て、それで凡てが分つたとするのでは駄目である。これは可なり
久しい前から痛感した事で、敢て今に始まつた事でないが、今回の式年遷宮に際して一層其感を深くし
た。どうか將來は學者の人々も、すべて信仰本位、實感本位の學説を立て、有効に一世を指導するや
うにして貰ひたいと考へる。近來ともすれば危険な思想が禍ひするのも、國體の本源を説く是等の學問
が實際を離れた空虚なものに成つてゐるから、其の間隙に乗ぜられるのである。私は返す返すも此の點
について學者の猛省を希望する。

無題

井田 磐楠

拾年あまり籠居の吾れ今となりて

政の庭に筵執らんとは

裾野にて

松村 久

尾花 咲くや富士の夕陽に銀の波